

「眠れないのですから。」「生意気だ。生意気だ」ゴーシュはすっかり真っ赤になって、昼間の楽長のしたように足踏みして怒鳴りましたが、にわかに気を変えて言いました。「では、ひいてあげよう。」ゴーシュは言いました。実際、内心はムツとしていたが扉にかぎをかけて、窓もみんな閉めてしまい、それからセロをとりだしてあかりを消し、気持ちを落ち着かせました。すると、外から二十日過ぎの月の光が部屋の中へ半分ほど入ってきました。「何をひけと言うんだ。」

「トロメライ、ロマチック、シューマン作曲」猫は口をとがらせながら、すまして言いました。「そうか。トロメライというのはこういうのか。」セロひきは、まずハンカチを引き裂いて自分の耳の穴へぎっしりつめました。それからまるで嵐のような勢いで「インドのトラ狩り」という曲を弾きはじめました。すると猫はしばらく首を曲げて聞いていましたが、いきなりパチパチパチッとまばたきをしたかと思うと、パッと扉の方へ飛びのきました。そしていきなりドンと扉へ体をぶつけましたが、扉は開きませんでした。猫はさあこれはもう一生一代の失敗をしたという風に慌てだし

て、目や額からパチパチ火花を出しました。すると今度は口のひげからも鼻からも火花が出ましたから、猫はくすぐったがって、しばらくくしゃみをするような顔をしてそれからまた、さあこうしてはいられないぞというように歩きだしました。ゴーシュはすっかり面白くなってますます勢よくやり出しました。すると今度は、猫はくしゃみをし始めました。それも何度も何